

『住吉社歌合』注釈(二)

武田元治

前稿に「社頭月」二十五番と「旅宿時雨」二十五番をとり上げたので、本稿はそれに続く「述懐」二十五番と判者俊成の跋文をとり上げる。

述懐

一番 左勝

兵衛佐

一〇二むかしとてみのおもひではなけれどもきみしのびねぞたえずなかる

右

修範朝臣

一〇三いくよしもありへむものとしらぬみはうきもつらきもなにかながかむ

左歌、みのおもひではなけれどもなごいへるすがた、いうにみゆ。こころも、そのゆゑはしらざれども旧主をしのべるおもむき、あはれに侍るめり。右歌、こころのたつところ、いとうるはしくはみゆ。ただし、右はさしておもへるところなきを、左はなほしのべるところあり。かつと申すべくや。

【通釈】

述懐

一番 左勝

兵衛佐

一〇二昔といっても、わたしに格別の思い出はないけれど、君を偲んで、いつもつい忍び泣きをしているのです。

右

修範朝臣

一〇三どれほどの年月をこの世で過ごせるか、分らない身として、この世の憂き、つらさなど、どうして嘆くことがあるうか。

左の歌は、「身の思ひ出はなけれども」などと詠んだ様子が、優美に見える。歌の心も、子細は分からないながら旧主をしのんでいる趣旨で、哀れを誘うようです。右の歌は、その信念が大層立派なものと思われる。しかし、右の歌はあまり（作者自身）の思いがうかがわれないのだが、左の歌はなお、人を思い慕っているところが認められる。（それで左が）勝ると申すべきかと思う。

【注】〇きみしのびねぞたえずなかる 「君偲び」と「忍び音泣く」とを掛けた表現。「忍び音泣く」は、人目をばばかり声を立てないように泣く意で、『大鏡』（師尹）に「火たき屋陣屋などとりやられけるほどにこそ、えたへずしのび音泣く人々はべりけれ」の用例がある。〇いくよしもありへむものとしらぬみ 幾世しも在り経むもの知らぬ身。どれほどの年月を生き長らえられるものか知らない身。「在り経」は、生き長らえる意。〇こころのたつところ 心に確立したところ。信念。

【考察】左の歌は、昔に格別の思い出もない我が身だが、君を偲しのんで
は偲しのび泣きをしているとの心であろう。「君偲しのび」に「忍しのび音」を重ね
た点に表現上の工夫が見られる。

右の歌は、どれほど生きられるか分からない人の身である以上、こ
の世の憂うれさつらさを嘆いても始まらないという考えを示している。こ
の考えによれば、左歌に見られるような感傷の心は無意味になるであ
らう。そういう人生論的な考えを詠んだ点に特色をもつと思われる。
ただ、その特色をもつことが、歌としての優れた特長をもつことと無
関係であるのは、言うまでもなからう。

俊成の判詞は、左の歌については、歌の姿が「優」で、心も「あは
れ」であると評している。右の歌については、「心のたつるところ」が
「いとうるはしく」は見えると言ひ、その立脚する信念は立派だと評
する一方で、「さして思へるところなき」点を問題にしている。作者の
歌にこめた気持ちを感じられなければ、思想の表明にとどまり、歌と
して高い評価はできないとする見方によると思われる。その点、左歌
の方は「しのべるところあり」と見られるところから、左の勝と判定
している。

二番 左持

公重朝臣

一〇三すみよしときこゆるさとにいとほずはおきどころなきみやどさ
ばや

右

円実

一〇四すぎでいにしあきにおくれてしもがるるきくやわがみのたぐひな
るらむ

左右のうた、いづれもこととがななくはきこゆ。ただし、かや
うのうた、すこしは人によることあり。左歌はこころぐるしき
やうながら、又おろかにきこゆ。女のうたならば優なるべきに
や。右歌は、孤露のよしをうれへたるにとりて、貴種きしゆのやか
ら、しかも花の最第さいだいのこころにかなはば、いよいよをかしかる

べし。ただし、かの延久第三のみこの歌に、うゑおきしきみも
なきよにとしへたる花は我が身のこちこそすれ、といへるう
たにや、かよひて待らむ。いづれも作者おぼつかなく侍るほ
ど、暫しば為な持ぢ。

【通釈】

二番 左持

公重朝臣

一〇三住みよと言われる住吉すまよしの里に、いとわれることがないなら、外
に置き所もない我が身をとどめたいものだ。

右

円実

一〇四過ぎ去った秋に遅れて霜枯れている菊の花、これは我が身の仲間
だろうかと思われる。

左右の歌は、いづれも特に欠点はない作と思われる。ただし、
このような歌は、作者（がどんな人なのか）によって少しは見
方が変わってくるころがある。左の歌は、気の毒なようであ
る一方、愚かにも思われる。（ただし）女の詠んだ歌ならば優美
と見られるかと思う。右の歌は、頼りない身の上を嘆き訴えて
いると見えるにつけて、貴族の人たち、それも華やかに栄える
一流の貴族の気に入られるなら、一層面白く見られるといった
作であろう。ただし、延久のみかどの三の宮の歌に、「植うゑおき
し君もなき世に年へたる花はわが身の心地こそすれ」と（亡なき
父君のゆかりの花に我が身をなぞらえて）詠んだ作があるが、
これに似通ったところもあるかと思ひます。（そんな次第で）
左右の歌はいずれも作者が明らかではありませんので（歌を十分
にとらえきれないため）、当面持としておきます。

【注】〇すみよし 「住みよし」を地名の「住吉」に掛けて言う。〇
孤露 孤独で支援してくれる人のないこと。〇貴種きしゆのやから 高貴な
家柄の一族。〇花の最第さいだい 華やかに栄える最高の階級かゐ（に属する人）
の意か。〇延久第三のみこ 後三条院の第三皇子、輔仁親王すけひと。後三条
院は一〇六八年から一〇七二年（延久四年）までの間天皇として在

位、一〇七三年（延久五年）に亡くなられたが、この年に輔仁親王出生。○うゑおきしきみもなきよに……『金葉集』雑部上（五一八）に、三宮（輔仁親王）の歌として出ている。詞書「円宗寺の花を御覧じて、後三条院御事などおぼしいでてよませ給ひける」。円宗寺は、後三条天皇の御願寺で、今の京都市右京区にあった。歌意は、植えておいた君もいない世に年を重ねた花は、（父君に先立たれて過ごす）我が身そのままに思われる、というのであろう。

【考察】左の歌は、住みよいと言われる住吉の里に、許されるものなら、外に置き所のない心細いこの身を置きたい、との心を詠む。右の歌は、秋の過ぎ去った後に霜枯れて残る菊の花は、わが身と同類のものに見える、との心を詠む。

俊成の判詞は、左右ともに「とがなく」は見えるとした上で、この種の歌は、どんな作者を想定するかによって見方が変わってくるころがあるという、判定上の問題を挙げている。すなわち左歌は、気の毒である一方愚かしくも思われるけれど、作者が女とすれば優美とも見られると言う。また右歌は、頼りない身の上を高位の貴族に愁訴した歌として面白いとも見られるけれども、父君を早く失った身を嘆く皇子の歌に似通っているとも思われると言う。それで左右の歌は作者が分からないと十分にとらえられないと見て、当面持とするとやっている。

後日判は、判定の公正さを保つ目的で作者の名を隠して行うのが原則とされるようになってきたと思われるが、述懐歌を対象とする場合は、作者の私的な思いをまとめた歌であるために、作者を隠されると特に歌の内容を的確にとらえるのが難しくなることもあるであろう。それで俊成は判者の立場からこれを問題として記したと見られる。

なお、作者の隠された歌の判をする際の心得を、長明の『無名抄』には次のように記している。

大かた、歌を判するに、作者を隠すといひながら、ひとへに知らぬもゆゆしき大事なり。（中略）ただ知らぬやうにて、うちうち

いささか心得たるがめでたきなり。

これは作者の隠された歌の判をする際の一般的な心得として記されたものだが、判者の立場では作者を隠されるとさまざまな面で不便を感じた状況を反映しているのであろう。

三番 左持 経盛朝臣

一〇五あはれとやかみもおもはむすみのえのふかくたのみをかくるみなれば

右 頼輔朝臣

一〇六たのみつるこのひとむらの人ごととせをゆづれすみよしのまつ

左歌、ふかくたのみをなどいへるわたり、よろしいといひつべし。右歌のこのひとむらは、このたびのうた人をいへるにや。

又わがひとついでへのやからにや。いかにもともにたのむころ、あさからずみゆれば、又持と申すべし。

【通釈】 三番 左持 経盛朝臣

一〇五（住吉の）神も、あわれと申してくださいさるであろうか、——住の江のように深く、神を頼みにする我が身なので。

右 頼輔朝臣

一〇六（住吉の）神を信じ頼みを掛けた、この一群の人のそれぞれに、千歳の命を授けよ、住吉の松よ。

左の歌は、「住の江の」深く頼みを「などと詠んだあたりが、結構と言えらると思う。右の歌で「このひとむら」というのは、今度の歌合の歌人たちのことを言ったのだろうか。あるいはまた自分の一家一族の人たちのことを言ったのだろうか。いずれにしても、左右の歌はともに神に頼みを掛ける心が浅くはないものと見えるので、これも持と申しませう。

【注】○すみのえのふかくたのみをかくる 「住の江」の深いこと

を、神に深く頼みを掛けることを言うのに重ねた表現。「住の江」で神が住吉の神であることを示している。○ちとせをゆづれずみよしのまつ 千年の長い寿命を授けよ、住吉の松よ。松は千年の樹齢を保つとされ、『土佐日記』の歌(六一)にも「松の千歳」と歌われている。

【考察】左の歌は、神は深く頼みを掛ける自分をあわれんでくださることだろうと、住吉の神に愁訴した趣と見られる。右の歌は、神を頼みとした一群の人々に千歳の命を授けよと、住吉の松に呼び掛ける形をとるが、この下句は、『栄花物語』(卷三十八「松のしづえ」)に記す、後三条院の住吉社参詣に関する人々の歌の中の次の一首によつたとされる。

たぐひなき君が御幸のうれしさに千歳をゆづれ住吉の松(五六九、源隆綱)

俊成の判詞は、左歌については、「(住の江の)深く頼みを」などと詠んだあたりを「よろし」と評価する。右歌については、「このひとむら」と言う人々は二様に受け取られることに触れるが、左右ともに神を「頼む心、浅からず」と評して持と判定している。

四番 左

一〇七あくがるるたまとみえけむなつむしのおもひはいまぞおもひしりぬる

右勝

実守朝臣

一〇八いはずともおもひはそらにしりぬらむあまくだりますすみよしのかみ

左歌、こころふかからむとはみえたり。ただし、これはかの和泉式部がさほのほたるもわがみよりといへるうたをおもひてよめるなるべし。さらば、あくがるるたまとほたるをおもひけむなどやうにあらばこそ、いづみしきぶがおもひをするには侍らめ。これは、たまとみえけむなつむしといひつれば、なつむしのおもひをおもひくるにてぞきこゆる。さらば、かのかつ

らのみこによみてたてまつりける、みよりあまれるおもひなりけりといへるうたのところにぞかなひぬべき。さてはまた、あくがるるたまとみえけむといへることばは、たがふべくや。右歌は、ことにことばづかひなど、えんにはあらねど、おもひはそらにといひて、あまくだりますなどいへる、ゆゑありてきこゆ。右のかちとすべくや。

【通釈】

四番 左

小侍従

一〇七思い悩む時、身から抜け出た魂と見えたという蛍、——その思いは、今こそよく分かりました。

右勝

実守朝臣

一〇八言わなくても、私の思いは空に——推し量って知ってくださいたでしょう、天下られた住吉の神よ。

左の歌は、思い入れの深い作のようには思われる。ただし、これはあの和泉式部の「沢の蛍もわが身より」と詠じた歌を念頭に置いて詠んだものである。それなら、「あくがるる魂と蛍を思ひけむ」などという風に詠まれていたのであれば、和泉式部の思いを知る意味になるというものでしょう。(ところが)

これは、「魂と見えけむ夏虫の(思ひ)」と言ったので、蛍の思いを知る意味に受け取られることになる。その意味ならば、あの桂の皇女に詠んで奉ったという、「(夏虫の)身より余れる思ひなりけり」と詠じた歌の心にふさわしいに違いない。(しかし)そうなるもまた、「あくがるる魂と見えけむ」と言った言葉は、そぐわなくなるだろうかと思う。右の歌は、言葉遣いなどがあまり優美ではないが、「思ひは空に」と言っておいて「天下ります」などと言ったのは、趣があると思われる。右の勝とすべきかと思う。

【注】○あくがるるたまとみえけむなつむし 身体から離れてさまよひ出る魂と見えたという蛍。和泉式部の歌「もの思へば沢の蛍もわが

身よりあくがれいづるたまかとぞ見る」（『後拾遺集』一一六二）によったと思われる。この歌は詞書に、「男に忘れ侍りけるころ、きぶねに参りて、みたらし川に蛍のとび侍りけるを見てよめる」とある。○そらに「知る」に掛かって、推量して知る意。後の「天下ります」と縁語になる。○おもひくるにてぞ内閣文庫本では「しるにてぞ」とあり、その方が意味がよく通じる。○かつらのみこによみてたてまつりける…歌「桂のみこ」は、宇多天皇の皇女の孚子内親王。『後撰集』（二〇九）に、「桂のみこの、ほたるをとらへてと言ひ侍りければ、わらはのかぎみの袖につつみて」の詞書で、「つつめどもかくれぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひなりけり」の歌が見える。この歌は『大和物語』四十段にも見えるが、ここでは、桂の宮に通つてきた式部卿の宮に対して少女が詠んだ歌とされる。

【考察】左の歌は、俊成も判詞で触れているとおり、「注」に挙げた和泉式部の歌、

もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれいづるたまかとぞ見る
（『後拾遺集』一一六二）

によった作であろう。そして、その恋に思い悩み、沢の蛍の光も自らの身から抜け出た魂かと思いた心が、今こそ自分にも思い知られたと詠んでいる。

右の歌は、三番右歌の場合にも引いた、『栄花物語』（卷三十八「松のしづえ」）に記される後三条院の住吉社参詣に関する人々の歌の中で、次の歌と表現の大部分が同じである。

このたびの祈りは空に知りぬらん天降ります住吉の神（五七五、藤原実政）

歌の初めの部分が、実政の歌では「このたびの祈りは」であるのに対して、実守の右の歌では「言はずとも思ひは」となっているだけの違いで、その後の表現は全く同じである。同類の作である。

俊成の判詞は、左歌については、「心深からむ」と見えると言う一方、和泉式部の「沢の蛍もわが身より」の歌を念頭に置いた作である

なら、「あくがるる魂と蛍を思ひけむ」という風に詠むべきで、この表現では和泉式部の思いを知ったという作意が十分に伝わらないと批判している。

そして右歌については、言葉遣いなどが艶ではないと批判するが、「思ひは空に」と言い「天下ります」と言った点を「ゆゑありてきこゆ」と評価し、右の勝としている。しかし評価したのは「空」と「天」との縁語仕立ての表現であろうが、これは右歌が利用したと思われる前述の実政の歌にすでに見られるところであって、右歌の手柄と言うことはできない。右歌が先行歌と同類の作である点が批判されるべきであったが、俊成は先行歌に思い及ばなかったようである。

五番

左勝

実家卿

一〇九くらのやまみねのさくらをかざしても人はものをやなほおもふらむ

右

敦頼

二〇ありてこそあらぬすがたになりもせめうしとていかがみをばなぐべき

左

勝

敦頼

就中、人はものをやなほおもふらむといへるすがた、ことよろしくこそきこえ侍れ。右も、うしとていかがなごいへるもじつづき、よろしくはみゆれど、なほ以左為勝。

【通釈】

五番

左勝

実家卿

一〇九位山の峰の桜を髪に挿す身（高位に昇った栄達の身）となつても、人はなほ物思ひをするが、どうしてであろうか。

右

敦頼

二〇この世にいてこそ、（出家して）姿を変える折もあらうに、世が住みづらいといて、どうして身を投げてよかろうか。

左の歌は、姿も心も大層面白い。この作者はどういう人なの

か、気になります。とりわけ、「人はものをやなほおもふらむ」と詠んだ歌い方が、殊に結構なものと思われます。右の歌も、「うしとていかか」などと詠んだ言葉の続け様が、結構には見えるが、やはり左を勝とする。

【注】○くらゐやま 位山。飛驒ひだの国の歌枕。今の岐阜県の北部にある山。その名から、山に登るのに例えて官位の昇進を意味する語として用いられた。

【考察】左の歌は、人は高位に昇っても物思いをするがなぜかと問う。嘆く心であらう。

右の歌は、この世に生きていてこそ出家して姿を変える折もあらうに、生きるつらさに身を投げてよいわけはない、との作意と思われ。これは少々理に落ちた作かと思う。

俊成の判詞は、左歌については「姿心いとをかし」と評価し、特に下句の「人はものをやなほ思ふらむ」という詠み様をよいとする。

右歌についても、「うしとていかか」などの言葉の続け様を「よろしくは見ゆ」と評するが、相対的に見て左の勝としている。

六番 左

一二なにごとをあげぬくれぬといそぐらむはかなきゆめのよとはしる

右勝 盛方朝臣

左歌、世上のならひをなげき、ゆめのうちのまどひをさとれる

ところが、ことにいうにしもあらざれど、みをうきくさとおきて、などしづむらむなどいへる、をかしといひつべし。右のちなるべし。

【通釈】

六番 左 成範卿
一二何事を、明けても暮れても急いでいるのであらうか、——はかない夢のようなこの世と知りながら。

右勝 盛方朝臣
一二物の数にも入らぬ身を、つらく思い、浮き草のようだと思うけれど、どうしていつまでも浮かび上がれぬ身なのだらうか。

左の歌は、俗世間の風習を嘆き、人々が夢のような世の中で悟り得ずにいるのを正しく認識した心であり、その道理は当然のことと見える。右の歌は、「沈むなるらむ」などと言った詠み様は、あまり優美ではないけれど、「身を浮き草」と言った上で、どうして「沈む」のだらうかなどと言ったのは、面白いと言えるであらう。右の勝であらう。

【注】○みをうきくさ 「うきくさ」に「憂き」と「浮き草」を掛けしている。「浮き草」は水面に浮かんでいて根が固定しない草であるところから、身の安定しない状態の例えに用いた。小野小町の歌「わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」(『古今集』九三八)の影響があらう。○よととも世ととも。いつも、の意。○しづむ 世に認められずに過ぐす。沈淪する。

【考察】左の歌は、世間一般の人々の生き方に関して、夢のような世と知りながら、何事を急いで暮らしているのかと批判している。

右の歌は、自己の身の上に関して、物の数にも入らぬ身を「浮き草」のように思うのに、いつまでも「沈む」身であるのはなぜかと詠む。自己の不遇を嘆く心をあらわにせず、言葉を工夫して選んで面白く仕立てている。

俊成の判詞は、左歌を「其理しかるべし」と評している。しかし右歌について、第五句あたりの言葉続きを優美とは言えないとしながらも、「浮き草」と「沈む」を対応させた表現を「をかし」と評価し、右の勝としている。

七番 左持

清輔朝臣

一三 わがさかりやよいづかたへゆきにけむしらぬおきなみにをばゆづりて

右

実綱卿

一四 かなればわがひとつらのかかるらむうらやましきはあきのかりがね

この左右、又ともによみ人によるべきうたなるべし。左、こころをかしくはみゆるを、壮年の辞身して去る、たれの人もおなじ。うらみしたふべきことなれど、さかりのとき、殊為^ニ声華客^一、或帯^ニ重職頭官^一、或列^ニ羽林蘭省^一などして、ことにおもひいであらむ人の、わがさかりやよいづかたへなどいへらむ、いよいよをかしくきこゆべきなり。されば、さだめてさやうの人の御うたなるべし。いとさかし^(内閣文庫本)。右歌は、わがひとつらをいかなればとあやしみて、うらやましきはあきのかりがねといへり。あきのかりのつらは、兄弟のついであやまたずとこそはみえて侍れ。もしそのついでたがへたることなどの侍るにや。しからば又いとをかし。これもよみ人おぼつかなきほど、暫^レ為^レ持。

【通釈】

七番 左持

清輔朝臣

一三 わが人生の盛りよ、おおい、どこへ行ってしまったのだろう、——見知らぬおきなみに身を譲り渡して。

右

実綱卿

一四 一体どうして、わが一族はこんな風なのだろう、——うらやましいのは、秋の雁の列の(兄弟の)順に並んだ様子だ。

この左右の歌は、これも共に作者(がどういう人なのか)によつて見方が変わってきそうな歌であろう。左の歌は、その心が面白いとは見えるが、盛りの年ごろがいずれその身を離れて去ってゆくのは、どの人も変わりはない。その運命を恨み、

壮年のころを恋しがるのは当然のことながら、人生の盛りの時、特に華族の中にその身を置き、重要な官職を与えられるとか、近衛府なり太政官なりの頭職の座に連なるとかして、殊に思い出をもつ人が、「わが盛りやよいづかたへ」などと詠んだ場合は、一層面白く思われるはずである。そういう次第で、(この左歌は)必ずやそのような人の御歌なのであろう。(そう考えると)大層面白い。右の歌は、自分の一族の在り方を「いかなれば」と怪しむにつけて、「うらやましきは秋のかりがね」と詠んでいる。秋の雁の列は兄弟の順序を誤ることがないと、文献にも見えています。あるいは兄弟の順序に背いたことなどが(一族の間に)あったというのでしょうか。それならまた(右歌も)大層面白いと思う。(ただし)この場合も作者が明らかにない状況では、(歌が十分にとらえきれないので)当面持としておく。

【注】○やよ 呼び掛けの言葉。「わが盛り」に対して呼び掛けたもの。○ひとつら 「わがひとつら」と言つて、一族、同族の意味に用いたものだが、後の「秋のかりがね」に關してその一列を思わせるようにした表現。○声華 「清華」の誤記であろう。「清華」は、貴い家柄、華族。日本では特に摂関家に次ぐ家柄を言つた。○羽林 近衛府や、その中将、少将の唐名。○蘭省 太政官の唐名。○あきのかりのつらは、兄弟のついであやまたず 雁の飛ぶ時の列が、兄弟の順序に従っているという見方は、中国の古代からあり、「雁行」「雁序」等の語がその意味で用いられた。『礼記』の王制に、「父之齒隨行、兄之齒雁行」(父の齒には隨行し、兄の齒には雁行す)とある。『菅家文章』卷一(一四)の道真の詩句に「申行雁有兄」(行を申べて雁は兄あり)とあるのも、その見方を受けている。

【考察】左の歌は、自分の盛年はどこへ行つたのか、見知らぬ老翁に身を譲り渡して、と老いを嘆く心を詠む。『拾遺集』の旋頭歌、
ます鏡底なる影にむかひて見る時にこそ知らぬ翁にあふ心地

すれ（五六五）

を下敷きにして、自分の盛年に、どこへ去ったのかと呼び掛ける形で詠んでいる。

右の歌は、自分の「ひとつら」（一族）はどうしてこうなのかと嘆き、それにつけてうらやましいのは秋の雁だと詠む。自分の「ひとつら」から雁の「ひとつら」（一列）を、またその雁の列は兄弟の順を守ることを思わせ、それによって自分の嘆きの種を示した作であろう。

この一首の背景には、作者実綱が一時弟の実国や実房に官位を越えられたことがあった。このことは『十訓抄』（九ノ四）や『古今著聞集』（一六六段）が伝えており、『古今著聞集』では一首を「かやうによみ給ひける、いとやさしくて」と評している。

俊成の判詞は、左右ともに「よみ人によるべき歌」、すなわちどんな作者なのかによって見方の変わる歌とし、その作者について自分は知らないという理由で判定を避け、持とする。この点は二番の判詞と同様である。

そして俊成は、歌が「いとをかし」と思われる場合の作者のイメージを示すが、それが特に清輔作の左歌については非常に具体的に、盛年に朝廷の高官を務めた人物のイメージを記している。一体俊成はこの歌合の判詞で、特に清輔の歌に関して詳しく記す傾向があり、「社頭月」四番判詞や、「旅宿時雨」二十二番判詞では詳細な批評が見られた。これは俊成の清輔に対する歌人としての対抗意識の表れと思われる。しかしこの「述懐」七番の判詞では、歌の表現に即した批評は見られず、作者像を想像したところを記し、それが清輔の実像と懸け離れている点で、清輔への揶揄と思われる。

ここで俊成が、作者は盛年のころ高い地位にあった人とすれば「いとをかし」などと記した点について、萩谷朴氏は、

作者が散位従四位上で、官は、太皇太后宮大進の卑官より上ったことのない清輔であることを知っているの侮辱であると思われるも致し方はあるまい。（『平安朝歌合大成』）

と言われているが、そのとおりであろう。

歌壇の主流をなした六条藤家に対し、これをしのぐ位置にたどり着いた俊成であれば、六条藤家の代表者と目される清輔に強い対抗意識をもったことは容易に推察されるが、これは余りにも見え透いた揶揄で、当時の俊成の未熟な面を露呈したものと言わざるを得ないであろう。

八番 左

俊恵法師

二五よのなかをうみわたりつとしへぬることはつものかみやたすけむ
けむ

右勝

実国卿

二六いへのかぜわがみのうへにすずしかれかみのしるしをあふぐとならば

左、うみわたりつといひて、ことはつものかみやたすけむといへるころはをかしきを、うみわたりつといへることば、ことに庶幾せられずやきこゆらむ。右、神のしるしをあふぐとならばといへるころ、をかしきこゆ。以_レ右為_レ勝。

【通釈】

八番 左

俊恵法師

二五この世の中を、うみわたる——憂いものと思つて過ごす、そんな風で長年暮らしてきたが、この状態は津守の神が助けてくださるであろうか。

右勝

実国卿

二六受け継がれた家風が、我が身の上にも、さわやかに伝わることを願う、——神の加護をいただけるのならば。

左の歌は、「うみわたりつ」と言つて、「ことは津守の神や助けむ」と詠んだ心は面白いのだが、「うみわたりつ」と言つた言葉自体が、あまり望ましくないとと思われるか。右の歌は、「神のしるしをあふぐとならば」と詠んだ心が、面白く思われる。（そこで）右の勝とする。

【注】〇うみわたる 「うみわたる」は、(世の中を)憂いものと思つて過ごす意であるが、「海渡る」を掛け、後の「津守」の語と縁をもたせた。こういう「うみわたる」の古い用例は、『伊勢物語』六十六段の歌「難波津をけさこそみつの浦ごととこれやこの世をうみわたる船」に見られる。〇つものりのかみ 津守の神。「津守」は、摂津の国の歌枕で、今の大阪市西成区津守町から住吉にかけての海辺の地。もとは津を守る人々の氏の名が、その人々の住む地名になったらしい。津守氏は、本来海上交通の守護神を祭った住吉神社の神官を代々務めた。「津守の神」は、住吉の神。〇いへのかぜ 「家風」を訓読した語で、家に代々伝えてきた流儀、伝統のことであるが、「風」を後の「すずし」「あふぐ」と縁をもたせて用いている。「家の風」を「すずし」と結びつけた先例には「千代をいのる心のうちのすずしきは絶えせぬ家の風にぞありける」(『後拾遺集』四三九、赤染衛門)がある。〇かみのしるしをあふぐ 神の靈験を仰ぎ求める意であるが、「あふぐ」は風を送る意の語でもあるので「家の風」の「風」と縁をもたせている。〇庶幾せられず 望ましくない。

【考察】左右の歌は、いずれも神に頼ることを詠み入れているが、表現の上で縁語を用い、それを見所とすると思われる点で共通する。

すなわち左の歌は、世の中を憂く思つて長年過ごしてきたが、津守の神が助けてくださるだろうかとこの心であるが、世の中を「倦みわたる」の語に「海渡る」を掛けて、海上交通の守護神である「津守の神」と縁をもたせている。

また右の歌は、神の御加護をいただけるのであれば、伝統の家風がわが身の上にも伝わるように願うとの心かと思うが、「仰ぐ」の語に「扇ぐ」を掛けて、「家の風」の「風」や「涼し」と縁をもたせている。

俊成の判詞は、左右の歌がこのように縁語を用いた表現によって、主想に副想を加えた点を特色と見たと思われ、そういう観点から二首の心を「をかし」と評したのであろう。ただし左の歌については「倦

みわたる」という言葉自体が「庶幾せられず」と批判している。歌の言葉として優雅でないと見たものかと思う。対する右の歌を勝と判定している。

九番 左

実房卿

一七いとふともなきものゆゑによのなかのあはれをさすがうちなげき
つつ

頼政朝臣

一八いたづらにとしもつものり右勝のうらにおふるまつぞわがみのたぐひな
りける

左歌、ひとつのすがたなり。こころもさることとはきこゆ。右歌、としもつものり右勝のうらにおふるといひて、まつぞわがみのなごいへる、いとよろしくみゆ。よりにて右のかちとす。

【通釈】

九番 左

実房卿

一七この世をいとうほどではないけれど、世の中の哀れさを、さすがに嘆きながら過ごしているのです。

右勝

頼政朝臣

一八なすこともなく年をとり、津守の浦に生えている(年を経た)松が、我が身の仲間ということになった。

左の歌は、一つの歌の姿であると思う。歌の心ももつともなことは思われる。(けれども)右の歌は、「年もつものり右勝の浦におふる」と言つて、「松ぞ我が身の」などと詠んでいるのが、大層結構に見える。そこで右の勝とする。

【注】〇ものゆゑに ……けれども、の意。逆接の接続助詞として用いた。〇としもつものり右勝のうら 「年も積もり」(年を重ね、の意)に「津守の浦」を掛ける。「津守の浦」は、摂津の国の歌枕、八番の

【注】参照。

【考察】左の歌は、この世をいとうほどではないが、その哀れさを嘆

いている由を詠む。

右の歌は、むなしく年老いた今、津守の浦の年を経た松が仲間と
なったとの心を詠む。「年も積もり」に「津守の浦」を掛けている。

俊成の判詞は、左歌については、「一つの姿なり」と姿に特色を認
め、心も一応評価している。しかし、右歌で、津守の浦の松を巧みな
表現で織りこんで、年老いた身の仲間となったと詠んだのをより高く
評価したようで、「いとよろしく見ゆ」と言つて右の勝としている。

【備考】九番右歌は『続古今集』（一七五六）に収められている。

十番 左勝

実定卿

一一九かぞふればやとせへにけりあはれわがしづみしことはきのふとお
もふに

右

俊成卿

一二〇いたづらにふりぬるみをもすみよしのまつはさりとまあはれし
らむ

左歌、たれの人のなにとならむとはしること侍らねど、ただう
ちみるうたのおもて、ころすがたいみじくあはれにも侍るか
な。まことよろづのこと、きのふけふとおぼゆるを、としつ
きのすぐること、さのみこそは侍るを、かぞふればやとせへに
けりあはれわがといへるすがた、いとしのびがたくこそみえ侍
れ。右歌、かみのく、かやうのころ、つねのことに侍るべ
し。しものく又、すこしころをやれるところあるやうにみえ
侍れど、いささかおもふところありて、判者愚老の拙歌に侍る
なり。又依例不加判。ただし、神慮定在左歌とぞおぼえ侍
る。

【通釈】

十番 左勝

実定卿

一一九数えてみると、八年が過ぎたのだ、——ああ、私が不遇の身と
なったのは、つい昨日のこのように思うのだが。

右

俊成卿

一二〇なすこともなく年老いた身だが、そんなわたしのことも、住吉の
松は、さすがに同情してくれるであらう。

左の歌は、だれがどうなったのか（具体的な事情）は知らない
のですが、ただ歌に詠まれたところを一見して、歌の心や姿が
非常に哀れに感じられるのです。まことに万事、つい昨今の出
来事と思われても、歳月が経過していることは、正にその通り
ですから、「数ふれば八年へにけりあはれ我が」と詠んだ歌の
姿が、きわめて感にたえないものに見えます。右の歌は、上の
句のこのような心は、在り来りのものでしょう。下の句は（や
はり、さしたることはないが）、少し心の憂さを晴らすように（内閣文庫本）
あるように見えますけれど、いささか思うところがあって、判
者である私の詠んだ拙作なのです。それで、これも先例に従っ
て判を加えないことにします。ただし、（住吉の）神のみ心は、
定めて左歌に向けられているかと思われまます。

【注】○やとせへにけり（自分が失意の身となってから）八年が経
過した。作者実定のその間の具体的な状況については『古今著聞集』
（巻一、二〇段）が伝えている。同書によると、応保二年（一一六
二）、藤原実定は同じ中納言であった藤原実長に、従二位昇進を先ん
じられ、以後不遇を嘆く年月が続いた。

【考察】左の歌は、自分が不遇の身となったのは昨日のこのように
思うが、あれから八年たった、と嘆いている。「注」で触れたように、
八年前の従二位昇叙に関して藤原実長に後れをとったことに発する、
実定の嘆きの歌である。『千載集』に見えるこの歌の詞書には、

大納言辞し申していづつかへず侍りけるとき、住吉の社の歌合と
て人々よみ侍りけるに、述懐の歌とてよみ侍りける。

とある。これは『古今著聞集』によると、長寛二年（一一六四）に実
定は実長と同時に大納言に任じられたが、かつて従二位昇叙の折に後
れをとった「恨みはなほ尽きせず」、そのため永万元年（一一六五）に

「大納言を辞して正二位をゆるさる」と記されている。そして、

上達部、官をやめて加階の例めづらしけれども、実長卿越えかへ
さんの思ひ深くて、思ひたたれけるとぞ。とかくしてしづまれ侍
りけるを、世の人をしみあへりけり。

とも言われている。そんな状況で実定が沈淪していた時期に、この歌は詠まれている。なお、『千載集』のこの歌の左注には、

そののち神感あるやうに夢想ありて、大納言にも還任して侍りけ
るとなむ。

とあるが、この実定の大納言還任は、安元三年（一一七七）のこと
で、『住吉社歌合』の七年後になる。

右の歌は、むなしく年老いた自分のことも、住吉の松はさすがに同
情してくれるであろう、と詠んでいる。その松が年を経ていることを
前提にした、五十七歳の俊成の述懐歌である。

その俊成の判詞は、左歌については、作者に関して知るところはな
いが、歌の心姿が「いみじくあはれ」に思われると評価している。

自作の右歌については、上の句が平凡であることを言った上で、下
の句は「すこし心（心あるやうに）をやれるところあるやうに」見えるかとも言うが、
判者の自作であるから先例に従って判を加えないものとする。この点
は「旅宿時雨」二十五番判詞の場合と同様である。ただし、住吉の神
の心は左歌にあるかと記し、勝負付も現行本では左の勝とされている。
もっとも『千載集』には左歌とともに右歌も収めているから、右
歌は俊成にとって少なくとも自信のある作であったと思われる。

【備考】十番の左右の歌は、ともに『千載集』（一一二六二、一一二六三）
に収められている。

十一番 左

兵衛督

二三ねざめしうきよをおもひあはすればまどろむゆめにかはらざり
けり

右勝

通親朝臣

二三すみのえのうきにおひたるしをれあしをなみひきたてよかみのめ
ぐみに

左歌、うきよをおもひあはすればといへるもじつづき、いうに
はみゆ。ことにみにおもふことなからむ人は、ただよのはかな
さなどばかりをおもはむ、しかあるべきことなり。右歌は、す
みのえのおき、うきにおひたるなどいへる、このうらにこと
よれり。右のかちとすべし。

【通釈】

十一番 左

兵衛督

二三目を覚まして、この憂き世を（眠っている時の様子と）思い比べ
ると、まどろんで見る夢と変わるところはなかったのです。

右勝

通親朝臣

二三住の江の泥地に生えたしおれた草を、波よ引き起こしてくれ、
（憂き世に芽が出ず暮らす私を、引き立ててください。）——神の
御利益として。

左の歌は、「憂き世を思ひ合はすれば」と詠んだ言葉続きが、優
美には見える。特にその身に思うことのない人の場合は、ただ
世のはかなさなどだけを思うのも、当然のことである。右の歌
は、「住の江の」と言った上で、「うきにおひたる」などと詠ん
でいるのが、この住吉の浦にふさわしい表現になっている。
（この点を評価して）右の勝としよう。

【注】○うき 泥深い地。「憂き」を掛けて言ったのであろう。

【考察】左の歌は、目覚めて憂き世を思うと、まどろんで見る夢と変
わらぬはかないものと思われた旨を詠む。現世をはかない夢と見るの
は、古歌にも「あはれはかなき夢の世なりや」（『大江嘉言集』一〇
〇）などと詠まれ、目新しいことではない。しかし左歌は夢のような
世と観念的に言ったのではなく、目覚めて現世が夢と変わらぬと気付
いた心で、そこが特色と言えは特色であろう。

右の歌は、住の江の泥地に生えたしおれた草を、引き起こしてくれ

と波に求める形で、憂き世に不遇で過ぐす自分を、引き立ててくださいいと住吉の神に訴えたものと見られる。隠喩による表現に工夫のある作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、「憂き世を思ひ合はすれば」と詠んだ言葉統きを「優」とし、内容も「しかあるべきこと」と一応肯定している。ただし右歌の、不遇を嘆き住吉の神に訴える心を、住の江の風物に託して表現した点について、より高く評価している。

十二番 左勝

季経朝臣

二三ほのかにてあるかなきかにすぐるみやなまにまがふあまのいさりび

右

隆信

二四すみよしのなをたのみこししるしありてかへるみやこにおもひでもがな

左、なまにまがふあまのいさりびといへるすがたことばは、よろしくみゆ。ほのかにてといへるや、いさりびのひとかたはいとをかし。人のよをすぐるかたや、ほのかならむこといかが。右、うたざまはいうにきこゆるが、かへるみやこにおもひでもがなといへるや、かへりなむずるところにあることをこそおもひいでとはいふべけれ。かくてはいとあひかなひてもほえぬにや。又これはかへらむまになどおもふころにや。それもころみじかきやうにきこゆ。左、すがたよろしきにつきて、かつと申すべし。

【通釈】

十二番 左勝

季経朝臣

二三かすかな様子で、目立たず暮らすわたしは、波間に見え隠れする(ほのかな)海人のたく火のようなものか。

右

隆信

二四住吉の、住みよいという名を頼みにして来たかいがあって、都へ

帰るについてよい思い出がほしいと思う。

左の歌は、「波間にまがふあまのいさり火」と詠んだ姿言葉は、結構に見える。「ほのかにて」と言ったのは、いさり火に関する方面で見ると大層面白い。(しかし)人の世を渡る方面について、「ほのか」であると言うのは、いかがであろうか。右の歌は、歌の様子は優美に思われるが、「帰る都に思ひでもがな」と言ったのは(疑問があるので)、帰ろうとする所に関して心に残っていることを、思い出と言うはずである。それをこのように(帰る都に思い出がほしいと)言ったのでは、(思い出の語意に)適合したものと思われまいであろう。あるいはこれは、やがて都に帰った時に(この住吉に関する)よい思い出がほしいなどと望む心であろうか。(そうであれば)それも性急に過ぎるように思われる。左の歌が、歌の姿が結構と思われるところから、勝ると判定しましょう。

【注】〇まがふ まじりあって見分けにくい。ここは遠くのいさり火が波間に定かにとらえにくい様子を言った。〇あまのいさりび 漁師が夜、魚を誘い寄せるためにたく火。〇ころみじかき ここでは気が短い、性急だ、の意であろう。この語をそういう意味に用いた用例は、「くひなだにたたけばあくる夏の夜を心みじかき人やかへりし」(古今和歌六帖 四四九三)など。

【考察】左の歌は、世に認められず目立たず暮らす自分の様子を、波間にかすかに見える漁師のいさり火に例えて詠んでいる。

右の歌は、「すみよし」の名を頼みにして来たかいがあって、「帰る都に思ひでもがな」と詠んでいる。

俊成の判詞は、左の歌については、下句の姿言葉を「よろしく見ゆ」と評価するが、初句「ほのかにて」は、いさり火にはふさわしくても人生の形容には不適當かと指摘する。

右の歌については、「歌ざまは優」とする一方で、下句「帰る都に思ひでもがな」の意味するところを問題視している。すなわち帰る都

について思い出がほしいというのは意味をなさないし、都へ帰った時に住吉のよい思い出がほしいというのなら、住吉へ来た効果を性急に求め過ぎると指摘したものかと思う。

結局、左の歌を「姿よろしき」点で勝としている。

十三番 左持

政平

一三五われもいかでよにながらへてすみよしのまつのちとせのゆくすゑもみむ

右

親重

一三六たとへけむなみはわがみにあらはれぬこぎゆくふねのあとほか

かは 左、いとありがたきことおもへるにやあらむ。右、なになにたとへてむあさほらけといふうたをおもひて、渭浜の浪おもてにあらはれゆくことをなげくころ、をかしくはみゆ。ほかかはといへるほど、すこし荒涼にやきこゆらむ。ただし、左は祝言に

ころざし、右はつねなきにことよれり。旨意雖懸隔、勝負可^二等同^一。

【通釈】

十三番 左持

政平

一三五わたしもどうか、この世に長く生きて、住吉の松の千年の寿命の、行く末を見届けようと思う。

右

親重

一三六無常の世の例えに詠まれた波は、我が身に（皴^{しづ}となって）現れた、——「漕ぎ行く船の跡の白波」は、よそ事ではない。

左の歌は、到底実現し難いことを望んでいるものであろうかと思う。右の歌は、「世の中を」何にたとへむ朝ぼらけ（漕ぎ行く船の跡の白波）という歌を思い浮かべて、皴の波が顔に現れてゆくことを嘆いた心が、面白いものとは思われる。（しかし）「ほかかは」と言っているあたりは、少し大まかな表現と感

じられるかと思う。ただし、左は祝いの歌を詠もうとしたものであり、右は無常に心を傾けた歌である。二首の主旨は大きな相違があるけれども、歌の優劣という点では差がないと言わばきである。

【注】○たとへけむなみ 無常の世の例えとして歌に詠まれた波。沙弥満誓の歌「世の中を何にたとへむ朝ぼらけこぎゆくふねの跡の白波」（『古今和歌六帖』一八二一、『拾遺集』一三二七）を念頭に置いて言った。満誓の歌は本来『万葉集』（三五四）に見えるが、第三句以下が「朝ぼらきこぎいにしふねの跡なきがごと」の形なので、親重の右歌は前記の平安時代の歌形によったと見られる。○こぎゆくふねのあとほかかは 満誓の歌で無常の世の例えにした「こぎゆくふねの跡の白波」（漕ぎ出していった船の跡に立つ白波）は、よそ事ではない、の意であろう。○渭浜の浪おもてにあらはれゆく 渭水の岸に寄せる波のように寄る皴が顔に現れてゆく。大江匡衡の「太公望之遇^二周文^一、渭浜之波置^二面^一」（『本朝文粹』卷三「寿考」、『和漢朗詠集』七二八）の句による。太公望呂尚が周の文王に会ったのは、渭水のほとりて釣りをしていた時だったが、顔に皴の寄った老人であったことを言ったもの。

【考察】左の歌は、長生きをして、住吉の松の千年の寿命の行く末を見ようとの心を詠む。

右の歌は、沙弥満誓の歌、

世の中を何にたとへむ朝ぼらけこぎゆくふねの跡の白波（『古今和歌六帖』一八二一、『拾遺集』一三二七）

を取り入れ、そこで無常の世を示すとされた波は、老いゆく自分の顔に皴の波として現れたという趣向を立てて、老いを嘆く心を詠む。

俊成の判詞は、左歌については、松の寿命の千年の先まで生きようと望んだ点を、「いとありがたきこと」、実現しがたいことを詠んだと評している。

右歌については、満誓の歌で無常の世の例えとされた波に、老いて

ゆく自分の顔に寄る皺の波を結びつけた趣向は、「をかしく」思われると評価するが、下句に「ほかかは」などと言った表現は精確でない指摘している。

その上で、左は祝いの歌を指し、右は無常に心を傾けた歌で、主旨が異なるが、歌の優劣としては同等であろうと評している。

十四番 左勝

経正

二七みやゐしていくよへぬらむすみよしのまつふくかぜもかみさびにけり

右

仲綱

二八よのなかをいとふところはさきだちていつまでとまるうきみなるらむ

左右の述懐、左はただ、みやゐしていくよへぬらむとおもふばかりを、おもふことにせるにや。右はよのなかをいとひながら、いつまでとまるべきにかとのみおもへる、いづれをまさると申すべしとおもふたまへわかねど、おほむ神にことかかれらにつきて、左のかちとや申すべからむ。

【通釈】

十四番 左勝

経正

二七ここに神が鎮座されて、幾代を経たことであろう、——住吉の松を吹く風の音も、神々しく思われる。

右

仲綱

二八世の中をいとう心ばかりは先立って、いつまでこの世にとどまっている憂き身なのであろうか。

左右の述懐の歌（思いを述べる歌）で、左の歌はただ「宮居して幾代経ぬらむ」と思うことだけを、自分の思いとして詠んだのであろうか。右の歌は、世の中をいとうつつも、いつまでこの世を離れずにいる身だろうかただ思っているもので、左右どちらを勝ると言い得るかは判断しかねますが、（住吉の）大

神に関して詠んでいる点で、左の勝と言うべきでしょうか。

【注】○みやゐ 宮居。神が鎮座すること。○よのなかをいとふ 俗世間をきらう。○おほむ神 「おほみ神」の変化した語。「おほみ」は高い敬意を示す接頭語。

【考察】左の歌は、住吉の社頭に神の鎮座された遠い昔をしのび、松風の音も神々しく感じられると詠む。社頭での敬虔な心を素直に表現している。ただ「述懐」という題による歌としては、俊成が判詞で触れているように問題のある作であろう。

右の歌は、俗世をいとう「心」は「先立ち」て、その俗世にいつまで憂き「身」は「とまる」ことかと詠む。俗世に関しての心と身との有り様を対比的に表現している。

俊成の判詞は、「述懐」の歌という観点から、左の歌の内容を問題にしたと見られる。左歌も思いを述べて詠んでいるに違いないが、これは「社頭松」といった題なら似合った思いでも、当時の「述懐」の通念がもっと個人的な思いを詠むことにあったために、問題として挙げたのであろう。

右の歌については、俗世に憂き身が「いつまでとまるべきにかとのみ思へる」と記している。「のみ」と言ったのは、やはり作者の思いにあきたりないためであろう。それで左右のいずれが歌として勝るか定めたいとし、その上で左が神に関することを詠んでいる点で勝としている。

十五番 左

卿

二九わかのうらとおもふばかりをたのみにてやどもさだめぬあまのこぞうき

右勝

季広

三〇すみよしのまつことなくていたづらにとはつもりうらみぞぞする

左、こころぐるしくはきこえながら、まことにわかのうらとお

もはむも、ゆくすゑのたのみありぬべし。右は、としはつもり
のうらみばかりにて、まつことなきは、おもひしられ侍れば、
右かつと申すべし。

【通釈】

十五番 左

二二九(わかぬ浦と思う——)若いと思うだけを頼りに暮らしている
が、定まった宿もない海人の子同然の身が、つらいことです。

右勝

季 広

二三〇(住吉の松ではないが)待つこともなくて、(津守の浦ではない
が)むなく年が積もり重なることを、嘆いているのです。

左の歌は、気の毒なこととは受けとられるけれど、まことに若
いと思うのは、将来が頼もしいことにもつながるであろう。右
の歌は、年を重ね老いる嘆きがあるだけで、期待できることが
ないという心が、よく納得されますので、右が勝つと判定しま
しょう。

【注】○わかぬ浦 和歌の浦(若の浦)。紀伊の国の歌枕。今の和歌
山市の、和歌川の川口付近に広がっていた入り海。この歌では年の
「若」いことの表現に用いている。○やどもさだめぬあまのこ 「白
波のよするなぎさに世をすぐすあまの子なれば宿もさだめず」(『和漢
朗詠集』七二二、海人詠。『新古今集』一七〇三等は第三句「世をつく
す」)による。決まった宿もない海人の子同然の頼りない身を言った
のであろう。○すみよしのまつ 「住吉の松」に掛けて「待つ」こと
を言う。○としはつもりうらみ 「津守の浦(回)」に掛けて「年は
積もりの恨み」の意を表す。「津守の浦」は摂津の国の歌枕で、今の大
阪市西成区津守から住吉にかけての入り江。

【考察】左の歌は、「わかぬ浦」に掛けて「若」いことを表し、若さだ
けを頼りにして暮らしているが、「宿も定めぬ海人の子」のような身
の上がつらい、と嘆いている。「宿も定めぬ海人の子」は、古歌、
白波のよするなぎさに世をすぐすあまの子なれば宿も定めぬ

(『和漢朗詠集』七二二)

よっている。この古歌の下句をとり入れて頼りない身の上を嘆いた
作であろう。

右の歌は、「住吉の松」に掛けて「待つ」ことを言い、また「津守の
浦(回)」に掛けて「年は積もりの恨み」と言って、待つこともなくむ
なく年が積もり老いてゆく、と嘆いている。

左は若い身の嘆き、右は老年の嘆きを詠んだもので、判詞ではそれ
ぞれの心を認めているようであるが、若ければ将来への希望ももてる
が、老いて期待することもない嘆きは「思い知られ」と言い、右の
勝としている。

十六番 左勝

広 盛

二三一よにすめど人しれぬみやしをりするみやまがくれのたにのしたみ
づ

右

智経法師

二三あしからむなにはのことはかねてよりちかくてまもれすすみよしの
かみ

この右のうた、あしからむなにはのことなどよそへながら、も
じつづき、ただものをいへるやうにやきこゆらむ。左のたにの
したみづは、いひながれたるやうにみたまふれば、左為勝。

【通釈】

十六番 左勝

広 盛

二三世の中に住むけれど、人目につかない我が身は、道しるべの要
る、奥山に隠れた谷間の水のようなものか。

右

智経法師

二三章を刈ったという、難波の人の不運のような、悪しきことのある
これは、前もって近い所で防ぎ守ってください、住吉の神よ。

この右の歌は、「あしからむなにはのこと」などと、古歌に見え
る(章刈りの難波の男の)ことを取り入れて詠んでいるが、そ

の言葉の続け様は、単に普通にものを言っているように感じられるかと思う。左の「谷の下水」の歌は、滞りなく歌っているように思いますが、左が勝とする。

【注】○しをりする 迷いやすい山道などで、目印のため小枝を折りなどして、道しるべとする。ここではそれが必要なほど、「み山隠れの谷の下水」が人目に付きにくいことを言おうとしたのであろう。○たにのしたみづ 谷間を流れる水。なお初句の「すめど」は「住めど」の意だが同音の「澄めど」の関係でこの「谷の下水」と縁語になる。

○あしからむなにはのこと 悪い巡り合わせに属する、あれこれのこと、の意であるが、葦刈りを仕事にするまでおちぶれた難波の男が、次の歌を詠んだ話を思わせる表現をとっている。「君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦ぞ住みうき」(『大和物語』一四八段、二四九。『拾遺集』五四〇)この話は『拾遺集』の詞書によって概要をうかがうと、次のように記されている。「難波に被へしに、ある女まかりたりけるに、もとしたしく侍りける男の、葦を刈りてあやしきさまになりて、道にあひて侍りけるに、さりげなくて、年ごろはえあはざりつる事など言ひつかはしたりければ、男のよみ侍りける」○いひな

がれたる 滞りなく歌っている。「谷の下水」と詠んだ歌である縁で「流れ」の語を用いたのであろう。

【考察】左の歌は、世の中で人に知られない身を、人目につきにくい「み山隠れの谷の下水」に例えて詠んでいる。

右の歌は、悪しき目には遭わないように守ってくださいと、住吉の神に祈る心であらうが、「あしからむなにはのこと」という表現は、葦刈りの難波の男の詠んだとされる次の歌をめぐる話を取り入れたと思われる。

君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦ぞ住みうき
『大和物語』一四八段、二四九。『拾遺集』五四〇)

俊成の判詞は、右の歌の文字続きが「ただものを言へるやうに」感じられるだろうと言っている。言葉の続け方が散文的だと批判したの

であらう。そして、その点、左の歌は滞りなく詠み下しているとして、左の勝と判定する。

十七番 左勝

一三三すみよしのなごのはまべにあさりしてけふぞしりぬるいけるかひをば

右

定長

一三四なげかじなよはさだめなきことのみかうきをもゆめとおもひなせかし

左歌、こころしかるべし。すがた又ひとつの体なるべし。右歌も、ひとつの俗にちかきすがたなれど、ことのみかとおき、なせかしなどいへる、なほむげにすてたることばなり。左をこそはかつと申すべく。

【通釈】

十七番 左勝

一三三住吉の、なごの浜べに漁をして、今日は生きた貝を見、生き甲斐があつたと思ひました。

右

定長

一三四嘆くまいよ、この世ははかなく移り変わることだけの世界なのか。つらいことは夢だと思ふようにするのがよろしい。

左の歌は、その心は妥当と言えるであらう。その姿もまた一つの歌体と認められるであらう。右の歌も、一つの俗に近い姿であるが、「ことのみか」と言い、「なせかし」などと言ったのは、やはりひどく(不用意に)言い捨てた言葉だと思ふ。当然左の歌の方が勝ると言うべきであらう。

【注】○なごのはまべ 歌枕としての「なご」の地名は、越中にもあるが、これは撰津のもので、今は埋め立てられた大阪市住吉区のあたりの海岸の一部を言ったらしい。○いけるかひ 「生ける貝」と「生ける甲斐」を掛けた表現。○ひとつの体 一種の歌体。基俊判の保安

二年『関白内大臣家歌合』野風七番裏書判詞に「左右ともに」の体をえたれば持とや申すべからむ」と記す前例がある。○すてたることば(不用意に)言い捨てた言葉。

【考察】左の歌は、「いけるかひ」を掛詞に用い、住吉のなごの浜べに漁をして生きた貝を見、生きた甲斐があったと思つた旨を詠んでいる。ただ、この掛詞は目新しいものではなく、次のような歌がある。

よもの海の浦うらごとにあされどもあやしく見えぬいけるかひかな
な(『金葉集』四六一、藤原資仲)

歌全体としては、次の『万葉集』の作者未詳の歌と第二句までが同じで、それを念頭に置いた作とも思われる。

住吉の名児の浜辺に馬立てて玉拾ひしく常忘らえず(一一五三七)

右の歌は、無常の世を嘆くまいと言つて、世は「定めなきこと」だけの世界なのかと問い掛け、憂きことは夢と思うようにせよと呼び掛けている。

俊成の判詞は、左歌については、その心を「しかるべし」と評するとともに、その姿を「一つの体」と認めている。このような掛詞を特色とする歌体は、『和歌体十種』に「両方致思体」として挙げるところで、そういう先例に従つたものと思われる。

右歌については、「一つの俗に近き姿」と言つた上で、「ことのみか」「なせかし」などの用語を「むげに捨てたる言葉」と評している。これらの言い方が俗語そのまま、歌の表現として洗練されていない点を批判したのであろう。

十八番 左持

伊 綱

一三五すみよしのきしかたのよにひきかへてはなさくまつのみともなら

ばや

右

季 定

一三六たのみこしかみのしるしにうきよをすすみよしとだにおもひなり
せば

このつがひの左右のことばづかひ、またははぶれごとにもゆ。なほはなのうたは、すこしもおもふべくや。おなじほどなるべし。

【通釈】

十八番 左持

伊 綱

一三五(住吉の岸ではないが、来し方——)過去のわたしの人生とは全く違つて、華やかに栄えるのを待つ身となりたいものだ。

右

季 定

一三六頼りしてきた(住吉の)神の御利益で、憂き世を、住みよいとさえ思えるようになったら、(どんなに)ありがたいことか)と思

う。この組み合わせの左右の歌の言葉遣いはまた、戯れ言のように思われる。そして特に(左の)花の歌は、今少し考えて詠むのがよいように思う。歌としては左右とも同じ程度の作である。

【注】○すみよしのきしかたのよ 「住吉の岸」に「来し方の世」(過去の人生)を言い掛けた表現。○はなさくまつのみ 華やかに栄えるのを待つ身、の意であろう。「はな」(花)と「み」(実)を縁語とし、また「まつ」(松)を「住吉」の縁で言つた表現。○うきよをすすみよしと 憂き世に対しても住みよいと。「すすみよし」は、「住吉」を掛け、上句の「かみ」が住吉の神であることを示す。○すこしもおもふべくや 意味がとらえにくい、『中宮亮重家朝臣家歌合』の俊成の判詞を参照すると、花十四番左歌「吉野山花のさかりを見わたせばただ春の日にきえぬ白雪」に対する俊成の判詞に、「しもの句のただの字ぞ、いますすこしもふべしやときこゆる」と評した例がある。これは安易な語の用い方を戒め、もう少し考えて詠むのがよいと言つたものと思われるので、これに準じて見ておきたい。

【考察】左の歌は、これまでの自分の人生とは違つた華やかに栄える身となりたい、との心であろうが、「注」で触れたように掛詞や縁語を

用いて、住吉の岸や松を織りこみ、そういう点を見所に仕立てた作と思われる。しかし、この左歌と同様に掛詞を用いて「住吉のきしかたの世」と詠んだ先行歌、

忘れ草つみて帰らむ住吉のきしかたの世は思ひ出でもなし（『後拾遺集』一〇六六、平棟仲）

の場合は、「住の江の岸におふてふ恋忘れ草」（『古今集』墨滅歌一一一、紀貫之）などと言われる「忘れ草」との関係で、「住吉の岸」は歌の主題と結びついている。ところがこの左歌の場合、「住吉の岸」は歌の主題と直接結びつくところがなく、単に形式的な修辭として用いられているに過ぎない。

右の歌は、住吉の神の御利益で憂き世が住みよいと思うようになれたら、と願う心で、「すみよし」の語の二つの意味を生かすように仕立てている。しかし、このような「すみよし」の語の用い方は、用い古されたものであり、発想が単純で、特色の乏しい作のように思われる。

俊成の判詞は、左右の歌の「言葉つかひ」が「戯れごと」のように見えると評している。二首の表現が掛詞の類の修辭を見所にするが、それで歌の心が生きることではなく、表面的な言葉の遊びと見られる点を批判したのであろう。

俊成は前の十七番左歌については、その掛詞を特色とする表現を「一つの体」と認めていたが、それは掛詞を通じて表現される心を「しかるべし」と見てのことで、そういう点に違いがあるのではないかと思う。

十九番 左勝

一三七やはらぐるひかりをたのむしるしにはこむよのやみをてらざざらめや

右

一三八かみにわれたのみをかけてまつなればすみよしにこそみをばやど

祐盛法師

憲盛

さめ

左歌、ことにめづらしきころにはあらず。又もじつづきもやすらかにぞみゆれど、こころのおもふところこそあはれに侍れ。右歌、たのみをかけてまつなればなどいへるは、をかしきやうなれど、うたのたけ、左なほすこしはまさるべくや。

【通釈】

十九番 左勝

祐盛法師

一三七（住吉の）神として和らげられた光をお頼りするので、その御利益には、来世の無明の闇を照らしてくださいと信じています。

右

憲盛

一三八神に私はおすがりして、御利益を待つ者だから、（社前の）松と同じように、住吉にこの身を置こうと思います。

左の歌は、特に目新しい心を詠んでいるわけではない。また言葉の続け様も（別に工夫を凝らさず）やすやすと詠んでいると見えるが、その心に願うところは、実に心をうたれる気がします。右の歌は、「たのみをかけてまつなれば」などと詠んでいる点は、面白いようだけれども、歌の格調が、左の方がやはり少々勝るであろうかと思う。

【注】○やはらぐる光 「和光」の訓読に当たる語。「和光」は仏・菩薩が威徳の光を和らげて衆生の中に現れる場合に言う。社頭月八番右の頼輔の歌にも用いられていた語で、住吉の神の本地を菩薩とする見方があったことなど、その歌の「注」で触れた。○こむよのやみ 来む世の闇。来世における無明の闇。真理に暗い無知な心、すなわち仏教で言う無明の心の状態を、闇に例えた語。○まつなれば 「まつ」は、（神の利益を）待つ意であるが、住吉の風景の特色の一つである「松」を掛けて言ったものであろう。「待つ」に「松」を掛けた「まつなれば」の先例は、「花もみな君がちとせをまつなればいづれの春か色もかはらん」（『金葉集』三二一、藤原長実）など。○うたのたけ 歌の格調の高さ。

【考察】左右の二首は、共に住吉の神を頼み利益を願う心であるが、左の歌は仏者の立場に基づいて、菩薩の化現である神の「やはらぐる光」を頼みとするので、来世の無明の闇を照らし導いてくださるに違いない、と詠む。右の歌は、住吉の神を頼みとして利益を「待つ」身だから、神前の「松」と同様に身を住吉に置こう、との心の作である。

俊成の判詞は、左歌については、特に奇を求めることなく詠まれているが、その思いが「あはれ」に感じられる、と評する。右歌については、「たのみをかけてまつなれば」などと詠んだ点を「をかしきやう」と評するが、これは「待つ」に「松」を掛けた工夫を一応評価したのであろう。しかし俊成は、そういった趣向の面白さよりも一首全体の風格を重く見たようで、「歌のたけ」という観点から左歌が勝ると判定している。

二十番 左持

邦 輔

二三九みのうさをわすれぐさこそきしにおふれむすみよしとあまもいひけれ

右

堀 川

一四〇よをわたるみちをたがへてまどふかないづれのかたにゆきかくれまし

左、人わすれぐさおふといふなりといふうたをおもひて、みのうさをとひきなしたるころ、よろしといひつべし。右、かかるうたのすがたにてはをかしきを、かの俊頼朝臣の、わぶるやまよにふるみちをふみたがへとよめるにぞ、ききなれたるこちすれど、いづれのかたになどいへるすゑのく、あはれにもきこゆ。持などや申すべからむ。

【通釈】

二十番 左持

邦 輔

二三九身のつらさを忘れさせる、忘れ草は、住吉の岸に生える、——な

るほど、住みよい所と（ここの）漁師も言うわけだ。

右

堀 川

一四〇世を渡る上で、進む道を間違えて、迷っているのです。——どちらの方に行って身を隠そうかしら。

左の歌は、「人忘れ草生ふと言ふなり」という歌を念頭に置いて「身の憂さを（忘れ草）」と詠み替えた作意が、まことに結構と言えるであろう。右の歌は、こういう歌の姿としては面白いが、あの俊頼朝臣が、「わぶる山世にふる道を踏みたがへ」と詠んでいるので、聞き慣れた気がするけれど、「いづれの方」（行き隠れまし）と詠んだ下の句は、哀れに思われる。持あたりと判定すべきかと思う。

【注】〇みのうさをわすれぐさ 身の憂さを忘れさせる、忘れ草。「忘れ草」は萱草かんせうの和名で、ユリ科の多年草。古代中国以来、憂さを忘れさせる草とされる。『古今集』墨滅歌「道しらばつみにもゆかむ住の江の岸におふてふこひ忘れ草」（一一一、貫之）などによれば、住の江（住吉）の岸に忘れ草が生えるという伝承があったらしい。〇人わすれぐさおふといふなり 『古今集』九一七の壬生忠岑の歌の下句で、上句は「すみよしとあまはつぐとも長ぬすな」。〇わぶるやまよにふるみちをふみたがへ 俊頼の『散木奇歌集』一四二七の歌の上句で、下句は「まどひつたよふ身をいかにせん」。

【考察】左の歌は、身の憂さを忘れさせる忘れ草は住吉の岸に生える、ここは住みよい所と漁師が言うわけだ、といった心であろう。俊成が判詞に言うように、忠岑の歌、

すみよしとあまはつぐとも長ぬすな人忘れ草おふといふなり

（『古今集』九一七）

によった作かと思われるが、歌の心は別のものに仕立てている。

右の歌は、世を渡る道を間違えて困っている、どこへ行って身を隠したのか、と迷う心を詠んだものであろう。状況を具体的に示さない形で詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌については、前記の忠岑の歌によりながら、忘れ草を（人を忘れさせる草から）身の憂さを忘れさせる草に替えた作意に対して、「よろし」と評価している。

右歌については、まずこういう歌い様の作としては「をかしき」歌と言ひ、次に、ただしすでに俊頼に「わぶる山世にふる道を踏みたがへ」という似た歌があることを言ひ、しかし「いづれの方に行き隠れまし」と詠んだ点は、「あはれにもきこゆ」と独自の特長を認め、持としている。

二十一番 左持

朝宗

一四二 かずならぬみこそおもへばうれしけれうきにつけてぞよをもいはむ

右

懐綱

一四三 ながらへばかくてのみやははてむとてすぎにしかたはなぐさみもしき

左、みこそおもへばなどいへるもじつづき、いうにみゆ。右、はてむとてとおけるほどぞ、つよきこゆれど、すぎにしかたはといへるころ、又よろし。よりて又為持。

【通釈】

二十一番 左持

朝宗

一四二 物の数でもない身は、思ってみると、うれしい気がする、——つらいことがある、それにつけて俗世を捨てようと思う。

左

懐綱

一四三 生き長らえたら、こんな（ふがいない）様子そのまま終わるものかと思つて、以前はそれで気を紛らせたものだった。

左の歌は、「身こそ思へば」などと詠んだ言葉の続け様が、優美に見える。右の歌は、「果てむとて」と言つたあたりは、強い言ひ様に思われるが、「過ぎにし方は」と詠んだ心は、やはり結構だと思ふ。そこでこれも持とする。

【注】○かずならぬみ 物の数ではない身。取るに足りない身。○よをもいとはむ 俗世間をいとい捨てよう。

【考察】左の歌は、取るに足りないわが身がうれし、つらいことにつけて俗世を捨てようと思う、と詠んでいる。「数ならぬ身」だから容易に俗世間を離れることができる、と世に認められない身を喜ぶ心の作であろう。

右の歌は、生きていればこんな状態をいつか脱しようと思つて、昔は気を紛らせた、と詠んでいる。しかし年を経た今も昔の状態のままだ、と嘆く心をおわせた作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、「身こそ思へば」あたりの言葉続きを「優」と評する。右歌については、「果てむとて」あたりの言ひ様が「強くきこゆ」として感心しない口ぶりであるが、「過ぎにし方は」と昔を顧みた心を「よろし」と評価し、持と判定している。

二十二番 左

源宗長

一四三 おひやらぬいはねのまつはわれなれやひさしくよよにみどりなるかな

かな

右持

藤原憲経

一四四 いけみづのいひいでずともおもひかねふかきうれへをかみはしむ

らむ

左歌、ひさしくよよにといへるころはよろしくきこゆるの、（内閣文庫本）まつのみひとりみどりなるかなといへるうたにぞ、ききなれたるこちする。右歌、いけみづのいひいづなど、又つねのことなれど、ふかきうれへをかみはしむらむといへる、こころもりて、すこしはまさるべくや。

【通釈】

二十二番 左

源宗長

一四三 まだ伸びきらない、大岩の上の松は、わたしの姿なのか、——長い年月の間、（六位の）緑の衣でいることだ。

「四言葉に出さなくても、(わたしが)思いにたえきれず、深い嘆きに沈んでいるのを、神は御承知のことであろう。

左の歌は、「久しく世々に」と詠んだ心は結構に思われるが、「松のみひとり緑なるかな」と詠んだ歌があるので、聞き慣れた気がする。右の歌は、「池水のいひいづ」などというのは、やはり在り来りの表現だが、「深き憂へを神は知るらん」と詠んだのは、心がこめられていて、少しは勝るであろうかと思う。

【注】〇おひやらぬ 生長しきらない。〇いはねのまつ 岩根の松。大きな岩の上に生えている松。〇われなれや 自分なのかしら。「なれ」は断定の助動詞「なり」の已然形。「や」は詠嘆の意の終助詞。ただし軽い疑問の意もあるか。〇みどりなるかな 緑は、松の色でもあるが、六位・七位の人の袍の色。『拾遺集』五七一の源順の長歌の一節にも、「松はいたづら 老いぬれど 緑の衣 ぬぎすてむ 春はいつとも しらなみの」と歌われる。〇いけみづの 池の水は、水門の一種の「械」で引くところから「言ひ」の枕詞。用例は「池水の言ひいづる事のかたければみごもりながら年ぞへにける」(『後撰集』八九〇、藤原敦忠)など。〇まつのみひとりみどりなるかなといへるうた「もみぢする 柱のなかに住吉の松のみひとりみどりなるかな」(『後拾遺集』九八七、津守国基)。五位の緋の袍を許された人々が多い中で、自分だけが六位の緑の袍の身分であることを嘆いた作。

【考察】左の歌は、「生ひやらぬ岩根の松」に自身をなぞらえ、松が久しく緑の色を保つように自分も長い間緑の袍を着る六位のままだと言ひ、五位に進めない身を嘆いている。

右の歌は、言葉に出さなくても、自分が心の中で深く嘆いているのを、神は知っていてくださるであろう、と詠む。「池水の」を枕詞として用い、またその縁で「深き」憂えと言っている。

俊成の判詞は、左の歌については、「久しく世々に」と詠んだ心は「よろし」とする。しかし眼目と思われる「緑なるかな」と緑の衣の

六位の身を嘆いた点は、すでに先行歌に「松のみひとり緑なるかな」(『後拾遺集』九八七、津守国基)と詠まれているので、「聞き慣れた心地」がする、目新しさがないと批判している。

右の歌については、まず「池水の」を枕詞にして「言ひ出づ」を導いた言い方は、やはり「常のこと」在り来りの表現だと批判する。けれども「深き憂へを神は知るらむ」と詠んだ点は、「心こもりて」感じられると評価し、左歌と比べて「少しは勝る」と判定している。

二十三番 左勝

中納言

一四五つのくにのなにはのこともあしのねのこのよはかくてかれはてねとや

右

素覚

一四六いかでなほまどふうきよをそむきなばまことのみちをふみもたがへじ

この左右、うたのころともにとあはれにみえ侍るにとりても、左歌、なにはのこともあしのねのおきて、このよはかくてかれはてねとやといへる、ころすがた、まことになにはえのなみそでにかくるここちし侍れば、以左為勝。

【通釈】

二十三番 左勝

中納言

一四五何事も思わしくないのですが、この一生はこんな具合で、(筆が枯れきるように) 朽ちはてよということでしょうか。

右

素覚

一四六迷いを重ねる憂き世を離れ、出家したものでなら、どうにかしてやはり、悟りの道を踏み外さないように心しよう。

この左右の歌は、歌の心がともに大層胸をうつと思われすが、それにつけても特に左の歌は、「なにはの事もあしのねの」と言った上で、「このよはかくて枯れはてねとや」と詠んだ、その心と姿が、まことに難波江で波がかかる時のように(涙で)

袖がぬれる心地がしますので、左の歌を勝とします。

【注】つづくにの 津の国の。ここでは枕詞として（撰津の国の地名「難波」^{ななば}）につながる点から、同音の「何は」にかかる。○なにはのことも 何はの事も。何事も。○あしのねの 葦の根の。ここでは枕詞として（葦に「節」がある点から、同音の）「世」にかかる。また「葦」は、上の「何はの事も」を受けて「悪し」を掛けて言ったものである。同様の用例に「阿弥陀仏といふより外はつの国のなにはのこともあしかりぬべし」（『夫木抄』一六三八六、源空）がある。○かれはてね（葦が枯れはてるように） 朽ちはてよ。「ね」は助動詞「ぬ」の命令形。○いかでなほ どうにかして、やはり。歌の下句「まことの道をふみもたがへじ」に続く。○うきよをそむきなば 憂き世を離れ（出家し）たのであれば。○まことの道 悟りの道。仏道を指す。

【考察】左の歌は、自分の人生を顧みて、何事も悪い状態だが、このまま朽ちはてる運命なのか、と嘆く心であろうが、その思いを難波の葦のイメージに託して表現した点に特色がある。

右の歌は、迷いを重ねる憂き世を捨てて出家した身として、どうか仏の道に外れず生きることを心掛けようという願いを、率直に詠んでいる。

俊成の判詞は、左右の歌の心が共に「いとあはれ」に見えると言った上で、特に左歌について、第二・三句から第四・五句へ詠み進めた部分を引用し、歌の心と姿が感に堪えない旨を記している。自分の悪い現状を葦に託し、その身の行く末を枯れ葦で示した一首の心と姿に感銘を受けたというのであろう。

二十四番 左持

静賢

一四七なにごとをまつとはなしにすみよしのかみにこころをかけぬまぞなき

右

寂超

一四八いたづらにおいにけるかないにしへの人のうゑけむすぎならなくに

左歌、まつとはなしになどいへるころ、いとをかしくきこゆるを、右歌、人のうゑけむすぎならなくにと詠ぜるすがた、又よろしくみゆ。よりに持とす。

【通釈】

二十四番 左持

静賢

一四七何事を待つともなく、暮らしているが、住吉の神を絶えず信仰しております。

右

寂超

一四八なすこともなく、年をとってしまった、——（わたしは）昔の人の植えた杉ではないのだが。

左の歌は、「まつとはなしに」などと詠んだ心が、大層面白く思われるが、右の歌は、「人のうゑけむ杉ならなく」と詠んだ姿が、これも結構に見える。そこで持と判定する。

【注】○まつとはなしにすみよしの 「まつ」は、待つ意であるが、同音の松を風景の特色とする「住吉」と縁語になる。「住吉」は、前の語句に続けると「住み」の心が掛けられているかと思われる。○こころをかけぬまぞなき 心を寄せない間とてない。絶えず心を寄せ、信仰している。○いたづらにおいにけるかな なすこともなく、むなしく老いてしまった。

【考察】左の歌は、自分は何を待ち望むともなく暮らしているが、住吉の神を絶えず信仰している、との心であろう。この左歌と同じ第一句第二句をもつ先行歌に、

なに事を待つとはなしに明けられてことしもけふになりにけるかな（『堀河百首』一一〇七、『金葉集』三〇四、源国信）

がある。これは『堀河百首』で除夜の題の歌で、第三句以下の内容は異なるが、その影響が考えられる。

右の歌は、なすこともなく自分は年をとった、昔の人の植えた杉で

はないのだが、という趣意のようである。この右歌と同じ第一句第二句をもつ先行歌に、

いたづらに老いにけるかな高砂の松やわが世のはてをかたらむ
〔貫之集〕一九九

があり、その影響が考えられる。また、この右歌の第三句以下は、「いにしへの人のうゑけむ杉ならなくに」とあるが、これと似た語句をもつ先行歌に、

いにしへの人のうゑけむ杉が枝にかすみたなびく春はきぬらし
〔万葉集〕一八二四、柿本人麻呂歌集

があり、この歌は傍線部の後が少し変化するが『赤人集』(一一二)や『家持集』(三)にも収められているので、その影響があるかと思われる。

俊成の判詞は、左歌については、「まつとはなしに」などと詠んだ心を「いとをかしく」思われると評している。このあたりの語句は先に触れたように先行歌に用いられているのだが、左歌の場合は「待つ」を同音の「松」の縁で住吉に結びつけた工夫があるので評価したのかと思う。

右歌については、「人のうゑけむ杉ならなくに」と詠んだ姿を「よろしく」見えると評して持と判定している。「人のうゑけむ杉」も前記のように古歌に用いられた語句だが、右歌ではその古歌の知られていることを前提にして、老いの嘆きの表現にこの語句を新しく生かしたと見て評価したものであろうか。

二十五番 左勝

寂念

一四九あやなしなたぶさにずずをとりながらおもふこころのかつみだる
らむ

右

左

一五〇なにごとをまつとはなしにながらへていつすみよしとおもふべき
みぞ

左歌、おもふこころのかつみだるらむといへるすゑのく、いとよろしくこそ待るめれ。ただし、たぶさにずずをといへるこそ、ずずはこゑにいふなり、ただことばにやきこゆらむ。右歌、いつすみよしとなどよそへたるはをかしきやうなれど、をほりのことばいひすてたるやうにやあらむ。左、むねのくぞおもふべくみゆれど、すゑのもじつづきいとをかし。かつとすべし。

【通釈】

二十五番 左勝

寂念

一四九おかしなことだ、——わが手に数珠を持っているのに、どうして、往生を願う心が一方で揺れ動くのであろうか。

右

左

一五〇何事待つともなく、生き永らえて、一体いつ、住みよいと思ふことのできるわが身なのか。

左の歌は、「思ふ心のかつ乱らむ」と詠んだ下の句が、大層結構なように思うのです。ただし、「たぶさに数珠を」と言ったのは、「数珠」は音読した名称なので、散文的な言葉と感じられる点があろうかと思う。右の歌は、「いつすみよしと」などと住吉に関係させて言ったのは面白いようだけれど、歌の終わりの言葉は無造作に言い放したように響くだろうかと思う。左の歌は、第二句がなお考慮を要するものと見えるが、下の句の言葉の続け様が大層面白い。勝ると判定しよう。

【注】○あやなしな 「あやなし」は、訳が分からない、筋道が通らない意。末尾の「な」は、詠嘆の気持ちを表わす終助詞。○たぶざ手。「たぶざにとる」は、手に持つ意。神楽歌にも「瑞垣の神のみ代より篠の葉をたぶざにとりて遊びけらしも」(「篠」)とある。○ずず数珠であろう。『平安朝歌合大成』では「鈴」とされている。『新編国歌大観』でも「ずず」とあるので、やはり鈴と見られたものかと思う。その場合の鈴は、小さな鐘の形をした法具の鈴を指し、それを訓

読した語ということになるであらうか。しかし俊成の判詞ではこの語を「声に言ふ名」すなわち音読した名称としていたから、俊成は鈴とは見ていなかったと思う。○おもふこころ　ここでは、往生を願う心。○まつとはなしに　前の二十四番の「注」参照。○すみよしと住み良しと、の意で前後に続くが、「住吉」をにおわした表現。○こゑにいふなり　音読する名称である。「声」には漢字の音を表す用法がある。○ただことば　(歌語でない) 普通の言葉。洗練されていない散文的な言葉。○むねのく　胸の句。歌の第二句。

【考察】左の歌は、数珠をもち仏を念ずる身であるのに、往生を願う心がすぐに動揺するのはなぜだろうか、「あやなしな」といぶかしみ嘆く心であらう。

右の歌は、何事を待つともなく生き永らえて、一体いつ住みよいつ思える日の来るわが身なのか、と身を顧みて嘆く心であらう。一首の冒頭の「なに事を待つとはなしに」の句は、前の二十四番左歌にも用いられていたが、元は源国信の歌、

なに事を待つとはなしに明けてことしもけふになりけるかな
〔堀河百首〕一一〇七、『金葉集』三〇四)

に見られる句で、その影響が考えられる。ただし「待つ」に「松」を響かせて「住吉」と縁をもたせたと見ると、二十四番左歌の場合と同様、国信の歌には見られない工夫と言える。

俊成の判詞は、左歌については、下の句「思ふ心のかつ乱らむ」を「いとよろしく」と評価するが、第二句の「ずず」は音読する語で「ただことば」の感じがあると批判する。右歌については、「いつすみよし」と住吉をとり入れた点は「をかしきやう」だが、終わりの言葉は無造作過ぎると批判する。そして結局、左歌の下句の言葉続きが「いとをかし」と見られる点で左の勝と判定している。

○跋

以下の文章は、判詞の最後に俊成が添えたものである。

そもそもわかのうらのみちは、ちひろのうみふかくして、そのそこをはかることかたく、万里のなみはるかにして、そのはてをしることなし。いはむや、しほちはるかにおくあみのひきひきなる人のころなれば、あまのうけふねころひとつにさだむることは、ありがたくなむある。かのかみかぜいせしまにははまをぎとなづくれど、なにはわたりにはあしとのみいひ、あづまのかたにはよしといふなるごとくに、おなじき歌なれども、人のころよりよになむあるうへに、たまのことばにもきずをまじへ、いさごのなかにもかねあることあるを、をしほのやまのおしこめて、よしのがはのよしとのみいひながさば、このみちのおとろへてゆかむことを、なげきおもふあまりに、かくれてはみやをまもるかみにおそれ、あらはれてはみちをこのむともがらにはばかりながら、あさきことのいづみ、おろかなるころのみづにまかせて、みゆるところをしるしあらはし侍ることをなむ、よるのころものかへすがへす、そでのこほりのおもひむすほほれ侍りぬる。

【通釈】

一体和歌の道は、極めて奥深いもので、その底が測りがたく、また甚だ広大で、その果てを知ることができない。まして人の心は思い思いの好みがあるから、一個人の心で歌の価値を判定することは、困難なのである。あの伊勢の国では浜萩と名付けるものでも、難波あたりでは専ら葦と呼び、東国の方ではよしと言おうで、それと同様、同じ歌であっても、それに対する人の心はその折々で同一とは言えないのである。その上、美しい表現でも案外欠点を交えていたり、また概して無価値と見えても意外な価値が見いだされたりすることがあるのを、一括して、よい歌だと言っただけ言って済ますようなことがあれば、和歌の道は衰退してゆく外はあるまい。それを嘆かわしく思うあまりに、幽微の世界においては歌道(みちを)を守護(本文ニヨル)される神に対して恐れ、現実の世界においては歌道を好む人々にはばかる思いをもちながらも、未熟

な言葉、至らぬ心のままに私見を（判詞として）書き記したのですが、このことを顧みるにつけて、何とも気がふさいでしまう次第です。

【注】○わかものうらのみち 和歌の道。ここではそれを言うのに紀伊の国の歌枕で名勝である「和歌の浦」を掛け、以下の文章に海に關係することを修辭として織りこんでゆく端緒にしている。○ちひろのみ 千尋の海。深い海のこと、ここでは「ふかく」の序詞。○万里のなみ 「千尋の海」の対句で、「はるかに」の序詞。○しほぢはるかにおくあみの 網を引く意から「ひきひき」の序詞。○ひきひき 各自が自分の心の引くのに任せた様子を言う語。思い思い。○あまのうけふね 海人の浮子船。漁夫が網の所在を知る目的で、浮きとして網に付けて置く船のことであるが、その不安定な様子から「定むることはありがたく」の序詞に用いた。○かみかぜ 神の威徳によって吹く風の意から「伊勢」の枕詞的な修辭に用いた。○いせしま 伊勢島。伊勢の国を言う歌語。○はまをぎ 浜辺に生える萩。萩はイネ科の多年草で、湿地に群生する。葦とは別物で、『万葉集』では「葦辺なる萩の葉さやぎ」（二二三八）と歌われ区別されていたと思われるが、この俊成の判詞に見えるように平安時代末ごろからは混同されてきたらしい。○よし 葦の別名。「あし」の名が「悪し」に通じるのを嫌って、「よし」にちなんだ名称。○よりよりに 折々に。『古今集』仮名序には「この人々をおきて、またすぐれたる人も、くれ竹の世々に聞かえ、片糸のよりよりに絶えずぞありける」という用例が見える。ここでは、人の心がその折その折で（同じでなく）存在することを言おうとしたものかと思う。○たまのことはば 美しい言葉。○いさごのなかにもこがねあること 砂の中に黄金が混じっているように、無価値と見えるものの中に貴重なものが混じっていること。○をしほのやまの小塩の山の。小塩山は山城の国の歌枕で、今の京都市西京区大原野の西にある山。ここでは、音の関連から「おしこめて」の序詞に用いた。○おしこめて おし包んで。一括して。○よしのがはの 吉野川

の。吉野川は大和の国の歌枕で、大台ヶ原山を源とし、今の奈良県の吉野の辺を経て流れ、和歌山県に入って紀ノ川となる。ここでは同音の関連で「よし」の序詞に用いた。○みやまもるかみ 「みやま」は、内閣文庫本、群書類従本には「みちを」とある。これによって歌道を守る神と解したい。○あさきことのいづみ 未熟な言葉。「ことのいづみ」は、「言泉」を訓読した語で、泉から水がわくように言葉が出てくることを本来は言う。「言泉」は基俊の判詞にも「言泉已凡流也」（『中宮亮頭輔家歌合』紅葉二番）と用いられている。○こころのみづ 「ことのいづみ」に対応させる形で、心の動きを言った。○よるのころもの 「夜の衣をかへしてぞ着る」（『古今集』五五四）などと歌われるところから、「かへすがへす」の序詞。○そでのこほりの 「むすほほれ」の序詞。

【考察】この俊成の跋文は、まず和歌が多様で人の見方も多様である以上、歌の価値を客観的に判定するのが困難なことを言い、さらに歌に価値があると見える場合も実態はさまざまであることに触れ、しかしそれらを一口に良いと評するだけでは歌道の発展はあり得ないと思われるところから、私見によって批評を加えたけれど、不十分な点が悔いられる旨を記している。文飾を施してはいるが、判者としての気持ちをもそれなりに伝えていると思う。

○作者一覧 上段の数字は、作者の歌の見える番数を示す。

頭宿懐	社旅述	実定	俊成
1	25	さねさだ 藤原（徳大寺）実定。父は右大臣公能、母は俊成の姉。正二位左大臣に至る。家集『林下集』。一一三九一一九一。	しゅんせい 藤原俊成。権中納言俊忠の子。初め葉室頼頼の養子となり名を頼広と称したが、のち本流に復して俊成と改
10	10		

7	6	6	5	5	4	4	3	3	2	2
19	20	20	21	21	22	22	23	23	24	24
4	5	5	6	6	7	7	8	8	9	9

名。正三位非参議皇太后宮大夫に至る。一一七六年出家、法名は釈阿。多くの歌合の判者を務め、歌壇の指導者として認められ、『千載集』を撰進した。家集『長秋詠藻』、歌論書『古来風体抄』等を残す。一一一四〜一二〇四。
 実房 さねふさ 藤原実房。内大臣公教の子。正二位左大臣に至る。一一四七―一二二五。
 頼政 よりまさ 源頼政。兵庫頭仲正の子。従三位に至る。武將として以仁王を奉じ平家と戦い、敗れて宇治で自害。歌林苑の会衆。家集『源三位頼政集』。一一〇四―一一八〇。
 俊恵 しゅんえ 木工頭源俊頼の子。東大寺の僧となる。白川の自坊歌林苑を広く歌人たちの交流の場とし、歌合や歌会を催した。家集『林葉集』。一一一三―没年未詳。
 実国 さねくに 藤原実国。内大臣公教の子。前出の実房の兄。正二位権大納言に至る。家集『実国集』。一一四〇―一一八三。
 清輔 きよすけ 藤原清輔。『詞花集』撰者の左京大夫頭輔の子。官位に恵まれず、正四位下、太皇太后宮大進に終わるが、六条藤家の歌学を大成、『奥義抄』『袋草紙』等を残す。家集『清輔集』。一一〇四―一一七七。
 実綱 さねつな 藤原実綱。内大臣公教の子。前出の実国の兄。正三位権中納言に至る。一一二六―一一八〇。
 成範 しげのり 藤原成範。もと成憲、少納言通憲(信西)の子。正二位権中納言に至る。一一三五―一一八七。
 盛方 もりかた 藤原盛方。中納言頭時の子。中宮大進、出羽守になる。歌林苑の会衆。一一三七―一二七八。
 実家 さねいえ 藤原実家。内大臣公能の子。前出の実定の弟。正二位大納言に至る。歌林苑会衆。家集『実家集』。一一四五―一一九三。
 敦頼 あつより 藤原敦頼。治部丞清孝の子。左馬助になるが、一一七二年出家、法名は道因。歌林苑の会衆。一〇九〇―没年未詳(一一七九年存命)。
 小侍従 こじじゅう 石清水八幡宮別当紀光清の女。二条天皇に出仕、のち太皇太后宮多子、さらに高倉天皇に仕えた。家集『小侍従集』。生没年未詳。

13	13	12	12	11	11	10	10	9	8	7
13	13	14	14	15	15	16	16	17	18	19
13	13	12	12	11	11	1	1	2	3	4

実守 さねもり 藤原実守。右大臣公能の子。前出の実定、実家の弟。従二位権中納言になる。一一四七―一一八五。
 経盛 つねもり 平経盛。刑部卿忠盛の子。清盛の弟。正三位参議に至る。壇の浦の合戦に敗れて入水。家集『経盛集』。一一二四―一一八五。
 頼輔 よりすけ 藤原頼輔。本名親忠。大納言忠教の子。従三位刑部卿に至る。歌林苑会衆。家集『頼輔集』。一一二二―一一八六。
 公重 きんしげ 藤原公重。中納言通季の子。左大臣実能の養子。右近少将になる。家集『風情集』。一一一八―一一七八。
 円実 えんじつ 左大臣実能の子。僧。『無名抄』の「関清水事」の段に、三井寺の円実坊阿闍梨として記されるのはこの人か。生没年未詳。
 兵衛佐 ひょうえのすけ 藤原為業(寂念)の女。二条院に仕えて掌侍となり、三河内侍の名があるが、のち後白河院女御琮子に仕え、兵衛佐と呼ばれた。歌林苑会衆。生没年未詳。
 修範 ながのり 藤原修範。少納言通憲(信西)の子。前出の成範の弟。正三位左京大夫に至る。一一四三―一一八三没か。
 兵衛督 ひょうえのかみ 神祇伯源頭仲の女で、待賢門院のち上西門院(鳥羽天皇皇女統子内親王)に仕え兵衛と呼ばれた人か。生没年未詳。
 通親 みちちか 源通親。内大臣雅通の子。正二位内大臣に至る。『高倉院殿島御幸記』等の作も残す。一一四九―一二〇二。
 季経 すえつね 藤原季経。左京大夫頭輔の子。前出の清輔の異母弟。非参議正三位に至る。清輔没後は六条藤家の代表歌人と目された。家集『季経入道集』。一一三一―一二二一。
 隆信 たかのぶ 藤原隆信。皇后宮少進為経(寂超)の子。母の美福門院加賀はのち俊成と再婚。右京権大夫に至る。似絵の開祖。家集『隆信集』。一一四二―一二〇五。
 政平 まさひら 賀茂政平。神主成平の子。片岡社の禰宜になった。生年未詳―一一七六。
 親重 ちかしげ 藤原親重。初名は憲親。佐渡守親賢の子。美濃権守になった。法名は勝命。一一二一―没年未詳。

20	20	19	19	18	18	17	17	16	16	15	15	14	14
6	6	7	7	8	8	9	9	10	10	11	11	12	12
20	20	19	19	18	18	17	17	16	16	15	15	14	14
堀河	邦輔	憲盛	祐盛	季定	伊綱	定長	大輔	智経	広盛	季広	卿	仲綱	経正
『金葉集』に見える摂政家堀河であろうが、生没年等未詳。神祇	くにすけ 藤原邦輔。大舍人助成方の子。前出の教頼の甥。従五位下行皇后宮権大進と記されているが、経歴未詳。	のりもり 藤原憲盛。玄蕃助為兼の子。散位従五位下と記されているが、経歴未詳。	ゆうせい 木工頭源俊頼の子。前出の俊恵の弟。叡山阿闍梨。歌林苑の会衆。一一一八―没年未詳。	すえさだ 藤原季定。散位従五位下と記されているが、系譜、経歴等未詳。	これつな 藤原伊綱。刑部大輔家基の子。五位中務大輔に至る。生没年未詳。	さだなが 藤原定長。阿闍梨俊海の子。伯父俊成の猶子となる。従五位上中務少輔に至るが、一一七二年ごろ出家、法名は寂蓮。御子左家の一員として歌壇で活躍し、『新古今集』の撰者の一人となるが、撰進前に没した。家集『寂蓮法師集』。生年未詳(一一三九ごろか)―一一〇二。	たいふ 殷富門院大輔。散位従五位下藤原信成の女。後白河院皇女亮子内親王(殷富門院)に出仕。歌林苑会衆。家集『殷富門院大輔集』。一一三三―一一二〇ごろ。	ちきょう? 大法師と記されているが、系譜、経歴等未詳。	ひろもり 平広盛。前出の参議経盛の子。刑部大輔になる。生没年未詳。	すえひろ 源季広。木工権守季兼の子。下野守になる。歌林苑会衆。生没年未詳。	きょう 摂政家の女房と見られるが、系譜、経歴等未詳。	なかつな 源仲綱。前出の頼政の子。伊豆守などになったが、宇治川の合戦に敗れ、父とともに自害した。歌林苑会衆。一一二六―一一八〇。	つねまさ 平経正。前出の経盛の子。皇太后宮亮などになるが、一の谷の合戦で戦死。琵琶に優れていた。歌林苑会衆。家集『経正朝臣集』。生年未詳―一一八四。

25	25	24	24	23	23	22	22	21	21
1	1	2	2	3	3	4	4	5	5
25	25	24	24	23	23	22	22	21	21
佐	寂念	寂超	印	静賢	素寛	中納言	憲経	懐綱	朝宗
者「故大炊御門右大臣家佐」と同一人すると、藤原公能家の女房と思われるが、系譜、経歴等未詳。	じゃくねん 俗名藤原為業。丹後守為忠の子。前出の寂超(為経)の兄。従五位下皇太后宮大進に至るが、一一五八年から一一六六年の間に出家、法名が寂念。一一三三―没年未詳。	じゃくちょう 俗名藤原為経。丹後守為忠の子。従五位上皇后宮少進に至るが、一一四三年出家、法名が寂超。一一一五ごろ―没年未詳。	いん 法勝寺執行になる。一一二四―没年未詳。	じやうけん 俗姓は藤原。少納言通憲(信西)の子。法少輔に至る。素寛は法名。歌林苑の会衆。生没年未詳。	そかく 俗名は藤原家基。伯耆守家光の子。従五位下刑部少輔に至る。素寛は法名。歌林苑の会衆。生没年未詳。	ちゅうなごん 殷富門院中納言。右近少将源通家の女。殷富門院に出仕。生没年未詳。	のりつね 藤原憲経。前出の教頼の子。歌林苑の会衆。正六位上と記されているが、経歴未詳。	かねつな 藤原懐綱。下野守懐遠の子。阿波権守等になる。生没年未詳。	あさむね 藤原朝宗。駿河権守従五位下と記されているが、系譜、経歴等未詳。『平安朝歌合大成』は、魚名流の教周の子、式家宇合流の光隆の子、師尹流の宗賢の子の三名を各可能性があるとして挙げる。